源氏物語[illegible][illegible]圖

3

源氏物語系圖

大上天皇

桐壺の巻より御位につく久しくありける給
葵巻に御位を東宮にゆづりておりゐさせ給
桐壺の御門と申　榊巻より崩御　霜月一日二
日に死

前坊　此子奥にあり

故院の御はらからとて葵巻にみえたり

桃園式部卿宮

薄雲巻にかくれさせ給　中務の宮とみえたり

槿斎院　母

榊巻より賀茂のいつきにゐ給　薄雲巻にをりて

父の御服ありしかばさくらちりぬるとせ給ふ桃園式部
卿のみこの女あさがほとあひ給をば給はらむれまさり
御髪おろし源氏に心ひかれてやまひし人也

按察小方

故院の女三の宮にかしづき給ひし
夕霧の右大臣にうせ給て後に御かくし
みえて蛍兵部卿のうへとなれり

女五宮

桐壺の弟桃園式部卿の妹にて
給し也朝顔の君をあづかり給ひし

朱雀院

母ハ弘徽殿の女御ハ二條太政大臣の女

弟と後りしに此父よりうつりひき

桐壺の帝の第一の御子東宮にたち給ふ
みかど位につき給ひて後に朱雀院に
おりゐ給ひて後に御出家ありて
西山の御寺にうつりすませ給

六條院

母桐壺更衣按察大納言之女

桐壺の帝の第二の御子にて御着袴同年の秋
母は息所にておくれ給ふ三の御子の方
にまゐれ給七つにて御文はじめ年源氏の姓を
給ふ給十二にて元服 添臥葵の上 左大臣の女
その夜引入大臣の君にてむかへ給 きり壺の更衣のかはりにて
藤壺の宮にて近衛中将紅葉賀の年に正三位 花宴の
の時にて中将 同巻に宰相 中将たり 葵の巻に

ねと宮内卿まいり内侍のかんの君の事しのひて
須磨の巻乃三月に摂州須磨の浦へおもむき給
須の年乃三月に播磨国明石の浦へうつろひ給
又の年の秋は門の御夢によりてめしかへされ給ひ
て程なく本の位にかへり給ふ数のみに大納言に
成給身をはしめの巻に内大臣に成給藤裏葉の巻に
牛車をゆるされ宮中にいりかふ乙女の巻に太政
大臣同巻に忠仁公の例のことく准三后の宣旨を
下され帝の護持僧のおこそかせなりしつ紙
思合て前のひうちの巻に若下の乳母あしき
めくたみとひさくきよ皇の若侍にならせ
て院になりてはなはたしき六條院と申　歳
亦六　完

くれ給より　白兵部卿の宮に見つかりしまた君とい
二面人のつきもそてまかりとて

螢兵部卿宮　此子を連奥にあることく

是ハ帥の宮と申て乙女の巻に朱雀院に行幸の
時兵部卿に任して玉かつらの内侍のかんの君に心
をかけし人紅梅の巻に世をさりし見えたり

承香殿四宮

紅葉賀の巻に童にて秋風楽舞給ふ人
也そのゝちハみえす

帥宮

螢の巻に六條院の馬場のうちにみえし人
なのとりれし　同螢の巻によりつひはりて見え

又給ふしん絵合のまきにもまうしくへし

冷泉院

源氏の実子也正月に生給葵のまきに春宮に
立給ふを須磨の巻にはゆるされ元服 二月に十一 同まきにゆつ
りをえて位につき給ふ若菜のまきに位をおりて東宮
にゆつりてみかとをおり給 在位十八年 橋姫に十のみ
こといへり

一宮 母弘徽殿の女御の女竹河に生給

女一宮 母こきでん女御 後任大臣女一宮より八姉

女二宮 母一宮に似たまへし竹河に生給是も一宮より八姉

宇治宮 母大臣女世の中もうつりかはりてへきさ侍り
えんいん弘徽殿の御母后のなやり あつまりひし
りそなしかきりと

う源氏の御かくれありてそのゝち御のれなかりし
ひんなうなりもりいてうとうみやくありし
もの給に京の御すまゐさへやけてしらは橋姫の巻
に宇治にうつりもとて給権中の巻にうせ
給うしそくの又とも中将八の宮とも

宇治大姫君 母大臣女
ありくまはせ給て後にかの大将ねんころにうとひ
給しかともあきらめ給ひてうせ給ふ
総角(アゲマキ)の大姫君とも

中君 母おなし
上巻に匂兵部卿宮にあひて早蕨に二条院
にむかへられ給ふうちまつり中君とも

ゆかりは中君とも

浮舟三君　母中将君昔は宇治へまいりける　今は常陸守の北方

母君陸奥国守なりしころ河内君ともお
ほしかりし住るそのかみはかなしかりし又
常陸守なりくだりし時も代々に見えたり
さかしう年へてやとり木の君ありのありて
中君にまゐりとゝまりせさせしとなりかり給
あつかはし昔の人の御ゆかりの姫君なれ
ばとりて東屋の君とて宇治にうつり給
世給し稲りの浮舟の君と句宮都々の文の中
にまれ思ひそこなひつかせとてきわめしてい所に
移りし後横川僧都のいもうとの尼になりし

かくれて小野といふ所にかくれ住み手習の東屋
の君とも浮舟の君とも

蜻蛉式部卿宮

蜻蛉の巻にいひ出たまへるよりしるされたる文
なのみにて、とかく明石の中宮も将所にかくせ
しなり

侍従　母は　の北方

宮君　母は

ちく父の宮に後まして母の世うとたの馬頭が
さうしきうと中宮ゆしてしくさうしめし
てはんとり女一宮ひろく、あの宮へまいりて
宮君とゆかしきあるる姫君さふらひてんを

五

とりせし人

一品宮　母弘徽殿院ニ同女一宮是也　承香殿の女御の
　　　　これ薫にえりあへ

蔵人院　母弘徽殿院に同

薫の君に狭衣のいつきに女御給く撫の君を
冷院の御腕めくありおほせ給こゝろにをしの

女三の宮の事

夕霧　母葵の上後仕太政大臣女

葵の巻八月にうまれてはゝうせし月母君下
されとりりを給ひつくしの君にあて見の殿上し女
の君にえ服してあさきみてかへりのりた大
君の通ひに入りて密通とゝのひ年のめでたし
また少女の巻二月に文章生となり

補と同年の秋除目の侍従にうつり給ふ　朱雀
院行幸の時侍従にてらうたくしの君にて中将
胡蝶の巻にて蔵人以前称号にて宰相　中将にて
の裏葉の巻にて権中納言　歳十九　若菜の巻にて右
大将　歳廿　次の年権大納言にて二の年左大将に
今の白宮の生まれ
将すなわち中将の巻にて右大臣　大将は竹河の巻
に左大臣源氏人の大将たり

薫右大将　母朱雀院女三宮　実ハ柏木の権大納言子

若菜の巻にて生まる六条院トつき給ひまつり
冷泉院の御子にして素ありてさせ給ひ白壁
の巻にて元服して二月十四日侍従にて四位侍従と
なりしに今年の秋右中将になりし巻に三位

して宰相になり 中将ゆえ 竹河の巻に中納言やがて
つぎの年二月の司召しの中に権大納言右大将を兼
もとありかゝりしに此世のよおもひすくしとぞら
椎本にみえし遥風百家の御もてなしぬべし

明石中宮 母明石上の通前播磨守女

身とつくしの巻に明石の浦にて生給ふ 三月十六日（大井々） 松風
の巻に母上に具して京人のぼりて桂の里に住
給ふしを薄雲の巻に二條院へむかへとりて紫の上
御まゐり給ふ藤裏葉の巻に春宮へまゐりて若菜より
十四歳にて皇子をうみ給ふ 桐壺の女御と申 御
法の巻に中宮とみえたり

右衛門督 母藤原給ひし日 中宮の御後見なりし人とみえたり

中納言 此二人のりゆみの日出仕せし人

源宰相中将 母三條上按察大君の二女

えいは藤人が将と竹河の巻に三位中将同巻
に宰相中将とみゆ 冷泉院の御子の女御に心寄人

侍従宰相 母

梅枝に白宮への御前に参り給ひし時御供せし人

頭中将 母

妹の大君に白宮への文もちて参り給ひし夜らく三宮
の夜いそぎまひしてと申人

左大弁 のりゆみの日出仕せし人

権中将 同

右中弁

竹河の巻に正月まいりの御ともにまいる
らの内侍のかみのこれはすくれてうつくしき人

四位少将
一条大臣の北のかたの御横川の宿禰の　之中文
の北殿せし人

蔵人兵衛佐
御随にはつうまつりし人

侍従
竹河乃正月に内侍のかみの君の所へまいりてうたうたひし人

弘徽殿女御　母寄桐中将に同
かりの中納言の巻に入内

中君　母致仕大臣女母
かりの中納言の巻に兵部卿の宮の兄の二宮の北方（今の宮一ハ宇治へくし）
に成給ふ母の一條宮君ともかたう成る

六君　母藤内侍のうけ参侍惟光か女
一条の宮にはしめて兵部卿の宮の北方

今上　母朱雀院女御すし殿（女三宮の兄の宮のこと）
明石の巻に二歳となりて御子をもうけし乃
巻にて東宮にたち給ふ乃巻に二月に御位たまはり
若菜の巻に位につかせ給ふ

女一宮　母下臈
若菜の巻に歎文

落葉宮　同母下臈更衣

院西山の御寺にうつり給し時若菜の巻に栢
木権大納言の北の方に御預け申させしかど後夕霧
の大将御心をかけ給ひて後夕霧の北となり
一条の宮にうつり給ふ後に夕霧二条の院の
事思ひわすれし比落葉をよみ給ひしより
し人也　小野の二条とも

一品内親王　御母今上帝の源氏大臣の女御にあり
明石上の比若菜巻に源氏のよりつきて六
条院にうつり給同巻に二品にし給六条院にて
御ありくあそびの日楽器の御琴あそばさる
御女房をよむこひてあひ給楽器の事にあらは
れ給ふを生る同巻に居よすし世給ふらく

女四宮
御門よりこうものしく志あり女三宮あり

東宮　母は明石の中宮六条院の御女
とう若菜巻に生れ給ふ同巻に春宮にたち給

二宮　母はおなじ
匂兵部卿の宮より夕霧の中君を北の方として六条
院のにしのたいに住給　蜻蛉巻に式部卿宮に
なる

匂兵部卿宮　御母大后同
若宮　母宇治御女中君　宿木巻に生れ給
匂兵部卿の宮より元服して兵部卿になり給ふ其の
上の春まうし三宮也此頃此世の御かたへ人にすぐれ
とみにひかくつらしくゆかしき給しよれんの女めに

しうそくはくれなゐなりし梅の匂ひをこのみ給ひき

四宮 母更衣腹

夕霧大将のむすめのくりあはし給ひし日匂宮の

ことに匂ひかされ給ひし人也

五宮 母右にをなし

かの中将の君にて賭弓の日夕霧の大将乃まうけに

ましらく一車にのせて伴ひ給ひし人

中務宮 母おなし

やよひ末に大将殿は桜の府にあそびまいり給ひし人

常陸宮 母更衣

夕霧の大将乃賭弓のかへりあるじ給ひし日共にまいりて

よみかはしにめされし人

女一宮 母右にをなし

紫の上にそだてられ給ひ六条院の南のまちに住給

ふつくしひゝて御世話し給ひ大将なとのこゝろ

をかけて心をかよはし給ひし女也一品宮と申

女二宮 母藤壺女御故左大臣女

やよひ末の暮によりて大将の少将に御給ひ花香

うちの藤乃宴の日にうつりて後はあらたなり

まれは大将乃いとやんごとなく思ひかしづき給

と一品の宮乃其のかたりしに御覚にはまさる

ひ給へくもみえさりし人

前坊 前東宮也御位につき給はぬ人也

秋好中宮 母六条御息所大臣女

薄雲の巻には秋好に立后は第十四みこと侍くし
には位ゆつりよりさきに斎宮のおりゐ給
絵合に源氏の御すゝめにて内へまいりて梅壺
といはれし女御にて中宮に立給ふ後に皇太后
宮にあらせ給ふ冷泉院おりゐさせ給ひし後も
秋の宮とも人によはれ給ひし人也

蛍兵部卿宮

宰相中将 母蓄秋院女

梅かえの巻に四位侍従にて御子行源宰相に二位中

又同巻に宰相中将みえ

侍従

梅かえの巻に冷泉院より文の御つかひみえ

手かきにおはしまされし人

女宮 母真木柱上髭黒の北の方の女

ちゝうせ給ひし後母によりて紅梅の北の

の按察大納言（アゼチノ）にむかへとられし時はともに渡り給へ

物しらうしく人なるひとも思はれたる宮には

あくまで匂兵部卿宮にすゝめられ給ひし人

先帝

式部卿宮 母

えハ紫の上のゆかりし女に式部卿に御坐

薄雲女院 母后 桐壺にまいらせ給ふ后腹の四宮也

桐壺の更衣うせて後御門の御思ひに御まいりて

と時めく母君めでたきと世の人のおもひけるなるへく

かくさめなまる人ともしめし比の宮のもとを参し
て桐壺の帝よりうへまいり給ふく藤壺と申
母后の御事まうしよハあらねど帝のかへり
みさせ給ふより六条院中将と申し
附より思ひくよせまいり給ふく冷泉院をう
ミ給ふ紅葉の賀乃年よ朱雀院母后ところえて
中宮よしそ給ふ院かくれさせ給ふく後桐壺よ
二月よりさりをおろし給ふく道よ入給ふを後
らしの年よ太上天皇になそらへられ宣旨く
よりて御封をそへらる薄雲の年よ三月よう
かくれさせ給ふ御年卅七母后桐壺のみかく女給
さやく日の宮とも

源氏宮 母ハきさらしうさ下﨟の更衣

朱雀院東宮の御附よりまいり給ふく女三宮を
うミ給ふ院おりさせ給ふく後に世給ふ藤壺女ご

なゆ

源中納言 母 若君 朱雀院の御中の紅葉乃試楽ニ
舞童 舞ーーく
えハ兵衛督と申しミ元の業よ中納言と見へてう

中将

侍従

民部大輔
以上三人妹の君たちの舞つかうまつれ給し時父
父の御すくよりいむく人よまいり給ひし人々也

兵衛督 位く

梅かえの巻にハ明石の中宮の姫君へまいり給ひん
さく六条院みつからかくのめてたきあとの人々ニ好ミ給
時ニ画書し人あるはかりハ三四年見えへ
てり

鬚黒大将ノ上　むかひ腹紫の上の姉

年比大将の北方にて君達あまたうミまいり
し給ふ大将玉かつらの君にうつりかはり給ひしから
世の中を恨しく思ひて槙柱君をよひて父の
ほとへ帰り給ひつ姫の君わかれまいらせし
柱にさしはさミ給ひつかなしき物語にて大将に返り
の庚申けかれはしまり何ハらしかれ給ひけり
ちかくしり

冷泉院女御　母おなし

乙女にうちへまいり給ふ王女御とそきこへ給

紫上　母按察大納言の女

母はやくかくれ給ふにより祖母尼君にやしなはれて
十はかりなる時北山にてはしめて六条院源氏の
中将と申せし時見そめまいらせ給ひし大
かたの山里にかくれ給ひし時の御ゆかり
にて人に知らせぬ御むすめにて藤つほのゆかり
なれはの后の君とて後二条院にむかへとら
れ　紫十　廿にて源氏つきかはりの末にやま
ひにかゝり出家をとけ給ひて六条院に
かくれ給ひしも源氏をしたひて　あはれ

の御子にてあれば人々おしみかなしみ給へる事也
[illegible]

摂政太政大臣 引入の大臣なり

桐壺の巻に左大臣とて源氏のかうぶりせし人
ことばにて此巻に太政大臣になく摂政し給 六十三才
いちじの人也 薄雲の巻に正月より世を 源氏の
御ちうと夕霧大将の母かたなり

致仕太政大臣 母ハ天皇ノ御女ニ三宮也

桐壺の巻に蔵人少将にて中将 紅葉
の賀の巻に正四位下 中将の兼官 葵の巻に三位中
将 須磨の巻に宰相の中将 [illegible]
[illegible]の巻に権中納言 薄雲に権大納言や

その [illegible]大将と [illegible] 女ニ内大臣 [illegible] 源氏の
[illegible] 世の中 [illegible] 給 内大臣 藤の裏葉
に太政大臣 若菜巻に致仕表となりてこあり
[illegible] 源氏の
[illegible] 二条の [illegible]

右中弁

[illegible]

左兵衛督 藤大納言

権中納言

[illegible] 源氏 [illegible]
[illegible]

葵上 母ハ [illegible] 日

[illegible]

桐壺帝に源氏にあひて葵の上に夕霧の大将と
いふ子をうみ給へり八月十余日源氏十二元服夜参
上十六にて合給

柏木権大納言 母二条太政大臣女四君 光源氏の御子にて
乙女の巻には少将胡蝶の巻に中将と見えたり
又は頭中将若菜の巻には参議右衛門督なり
中納言 若菜二子の巻乃衛門督と見えたり病に
かかりてしに柏木の巻に病のうちに権大
の大納言になりて程なく失せ給ふ中将
といふ

紅梅右大臣 母 同上
初めは童名にて殿上をゆるさる弁少将君
若菜に左大弁紅梅に按察大納言竹河に右
大臣になりて大将をかね左右大将を兼帯
ぞの日より ... くらゐ ... ひし人也

頭中将

麗景殿女御 母右少弁の姫
紅梅の巻には母にはなれて...へまいりて麗景
殿の女御と申の也

中君 母女御に同じ
紅梅の巻に東宮にまいらむとする按察大納言の
紅梅のにしてあり

大輔 母按察の姫君
紅梅の巻にみゆ殿上をゆるされて白...

出てゆきけりとぞ

弘徽殿（コキデン）女御　母左馬寮の目

身をつくしの巻に十二歳にて位にまいり給ふ冷泉
院の女一宮乃母也絵合に給ひし御方也

夕霧大将北方　母按察大納言の北方

此さんなくもりこえ乃三條殿にやしなはれて夕
霧のおもひしるぞかゝるいひかはし給ひそれよりはれんに
おもひかはしかや雲井の雁も我しりやとすき
うしろや藤裏葉の巻にゆるし宰相中将也

左馬頭　母

若くして文大臣御かしづきまいらせ

藤宰相　母

此二人夕霧の北のかたの兄弟にて父子のかたらひ給
し君三ヶ所ならひし人々にて北方にかりそめ
（ゝら）

右大弁

柏木権大納言ろうさうふの御子也一条の北の方の御子
ろうにゃなしそれし人々

中将

蔵人少将　若菜巻に少将となくなり侍従貴に八郎君とて五人ありし一人は同法の君ちか人の此二人今の有は我し也

此二人夕霧の北のかたの兄にしにもかく殿上して給
し時朝臣（アヒグシ）奥しへ人にかはらのとなりことぞり夕霧
の大将一條の宮はらしひ給ひし時うくしとこそてちし
のかくれば彼みなくあかれとおもひとしとこそ、
と佳くへらりし人也

玉鬘

四つのとしめのとに具して筑紫へくだり年へて
のちたまかづらの君とて京へのぼり源氏乃大臣に
たづねられ給ひて六条院にむかへとられ後髭黒の大将
のうへとなりしより槙柱にも贈太政大臣とよばれ
附むことなり給小貳[illegible]ひごの國乃たゆふのげんがけさう
のへんせ

撫子

前の巻のなによせられしなりとしるべし

近江君

母はいやしきものゝむすめにて大臣のむすめ
とり給ひて女御の御方にさぶらはせ給しかりやと
くんりさりしらけりし人也おほへさら[illegible]と云
さしめ[illegible]によしみ[illegible]ありしはひつきもとり[illegible]
まゐらせしおもしろき言葉もそしられし人と[illegible]
なかりてかせられてもありて小さくもふこ
思ひいとわらひもおもしろくてとゞめてのぞ
きそのみ給ふし[illegible]まりけり

● 二條太政大臣

朱雀院のそくそくの内坊[illegible]かはし太政大臣ともなる
さ[illegible]のきはに太政大臣にかへり給ふ明石の君[illegible]
給ぬゆきのあしたのおぼしめすさ[illegible]なりおく

大納言

大臣とも

頭弁 母

朱雀院の御世の弁也源氏のおほね世の中ものさはかし
くおぼされける比雲林院に二三日こもりて出
給ひけるに人まゐりたるに白虹日をつらぬ
けりと誦せし人なり

麗景殿女御 母

朱雀院東宮の時の女御頭弁の妹

左中弁 母

四位少将 母

此二人源氏中将ときさらぎの月夜の宴の頃(?)
なり源氏もろともにして此の陣より入とて
右大臣家の藤花の宴にまゐりたる人也ときによりて
あはせし人也

蔵人少将

ちくぜんの前の守源氏の須磨におはしける
まつりごとのむしろにてのちぞ御せうそこ
つかうまつりし人也妹もおなじ所にて

いつもつ侍女守のむすめの君也 此院よりかへり

弘徽殿大后 朱雀院の母

葵の上の后にさらまつりし君なれど源氏
月ごろよりのかたは源氏をも憎みしたまひつり

帥宮北方

まひしなし

四君

致仕大臣の北方桐壺の右大臣三人册之

弘徽殿女御のいもうと

朧月夜内侍 册

南殿の花の宴はてゝ御酔の後源氏中将

酔の御心ちに弘徽殿のほそ殿によりて見給へ

るに三の口あきたりけり朧月夜に似るもの

ぞなきとうち誦してくる人をとらへ給ひぬ

其人とぞ思ひよりてうきなぞたちにける

猶此君のおぼしわするゝ事なくて忍び別

かの須磨の浦の事ともはこのをこりのひとつなり

也其後は朱雀院にまいりてつかへし殿と

おもひ捨て三月に内侍のかみ若菜下巻

に出家して源氏大将須磨の浦にさすらへ給ひし

此人のゆへ也二條君内侍のことも

● 右大臣

今上の母方のおほち桐壺の帝の右大臣にあたる

よりたのむ右大臣に轉じ給へるなり

同書にみえたり

鬚(ヒゲ)黒(名)大将大臣 册

前の事にもあたる梅が枝に右大将後若菜に

太政大臣になりて新帝の御うしろみ後には

真木柱の世継にもなりて竹河に見えたり

より後の事て見えし人々野路(ノヂ)の大臣

ども今上の御はらから也

承香殿女御

今上の御母朱雀院の女御にておはせし又ゆうりし若菜はんくより

頭中将　母

六條院源氏大将とおなじく時世の年ごろなりし

きよげにしし此君ひまありて御位ののぞみにかゝれ

ねよおもくもて出しつゝ家にこもらんとおもひ

どもさらにて給し曉たてまつりしのほどにさくさ

進てえまりし人也

冷泉院
女御

藤中納言　母式部卿の一女

冷泉院位の御時の女御・桂根よ見へたり

竹河の正月にまうでての内侍のかみとなりてより

かり人

左兵衛督　母むらくもの内侍

たるみに上にありしけり此のみはれぐすさき兵衛

まゐこの人是は中納言行川に左兵衛督より

右大弁（たい）　母同

此君しりて右大弁けりて此人是は大中弁行川に左

大弁より

頭中将　母同

是は従行川に頭中将より

真木柱上　母中納言局

若菜まきに蛍の兵部卿のもとにうつしまらせ給て

めち紅梅大臣の按察大納言と申しし時より
かよひそめ給て此方あなたへつゝしく大臣あなたへ
の内侍のかみにまゐり給しに似給へし北の方に
具して御かたちのよさにまさり給しかとこの姫君
按察使ハられとよすかなとまされけし人也

冷泉院女御　母玉かつらの内侍のかみ
竹川の巻に冷泉院へまいりて女一宮女二宮の
御母なり蔵人の大臣の御子宰相中将蔵人少将とも
申し此ふつてさて人也

内侍のかみ　母同
竹河巻に母の内侍のかみのゆつりをえて内侍
のかみになりやかて内へまいり給竹川に中君とあり

左大臣

藤壺女御
今上春宮の御時よりまいりしが明石の
女御にをされ給て世の中ものさびしく
おぼされたり女二宮ばかりをかしづき給ふ
やとりまようせ給ふ竹河にみえたり

大蔵卿

修理大夫
此二人女御の一腹にあらん

大臣

入道播磨守

えハ近衛中将なりけるが中将をさりて播磨守になりし後そこの国の守となりて住けりながくきれいなりの国にさらへきうらへなどしさきてうしらあんして明石浦に年をへさられにきり源氏大将須磨の浦にうつり給し此夢のつげによりてむかへとりまゐらせけるゆかりむすめのきさいでさぬが中宮の母にて后のおや生れ給しときてこの世にのこる思ひなくてかの浦をさりて跡なき山にいりぬ明石の入道といふ源氏集にはさゝさのこしかちとあり是也

明石上 母也中宮の大むすめ

源氏へ明石の浦にてあひし此時十八にておはしまして中宮をうみ奉り松風にその浦をはなれて都へのぼりて大井川のほとりにすみしが二女は六條院にまゐりてそのゝちさと云也

按察大納言

源氏の母方の伯父にて大臣の弟にて明石の入道のゆかりといへり

桐壺更衣 此女所と云ハ同事也 桐別

故按察大納言の女更衣也源氏乃母也源氏を生まゐらせて三年といふ秋の世はかなくなり給へりてきうりやまい内をまかでて輦車の宣旨をゆるさせ給て愛宕山へおくる後三位よそへらる皇后をおくるあまこの御中り

時めき給ひしを唐楊貴妃(やうきひ)のためしを引なり

雲林院ノ律師 母

源氏雲林院に籠りたまひし比法文とひ給
し人。源氏の伯父なり

大臣

六条御息所

十六にて春宮にまいりて秋好中宮をうみ
十九にて春宮にをくれ給ひて。廿にてむすめ
の斎宮に具して伊勢へくだり給ふ。桐壺
に見えたり。車あらそひの事に執心ふかき
世給ふによりて後にかくれ給ふ。其後七八日あ
まりして世給ぬ。源氏の思ひ人にて。伊勢の御息
ありしゆかしき人のうへ。川のものゝけをまぬかれし
それからしかして行河にありけり

大臣

宇治ノ大君方

宇治ノ女君(文の女イ)二人のうちおほいきみは匂宮ノ上(君イ)乃
うへにてかくれ給ふ。中君をかほる大将とさしあひて世給ぬ

文

紀伊守 大臣君の孫

小野の尼君の乃とい萱大納よつかうまつりし
人也。小野にて手習君をうしなひて大納めか
しかしてけくさ海北にひとへにゐても

常陸守ノ少将

宇治の八宮の北の方のめいハ昔ハ中将の君とてさふら
ひしが北の方うせ給ひて後ハ宮にちかくさふらひ浮舟
をうむ。浮舟の君と申す宮のみゆるしなきにより
かれうさ母とともに浮舟ハ常陸守の北
の方となりてみちのくにまかりけり

左中弁

宇治北の方の母かたのをぢ

椎本の巻より宇治の姫君にちかづく北方の
母かたのをぢなり

弁尼

母柏木右衛門督のめのと女二宮の小侍従といひし
が腹也。かの右衛門督の昔の事いひきかせたる
人也。宇治の大姫君うせ給ひて後尼になりたる。さ

まうひつりえさせてまつり

● 右衛門督

按察中納言とも申すなり

右衛門佐

もとハのみとて空蝉の尼乃弟也。源氏中将
の方よりへの時童なりしを御覧してむか
へめしつかひ給ひしが源氏うせ給ひ
がおちぶれぬ世のさがみなく須磨の御くだりに
まうさずなりしをうらみ姉の男ま常陸
て常陸へくだりし。空蝉のかりの時右衛門
のすけとなり昔の小君也

空蝉尼

ちゝの中納言うせて後伊予介がめとなる。常陸

寺にゐまうしけるがひとりまうけ。寒座
のちに京へ帰りけり。同じくにむかへしにきたれ
く姫君ミありの阿闍梨寺（昔ノ絵師寺之）也さきにかしなり
をいとひくるしみける。後にいはくのくせとれ
へく大澤院にもとなり。昔かのりをつかしめく
のふみくさふくゐすゐるかうり山ふしとなりとよ
こりうゑしいかいかるかり公めくかう寒し
とのもとめおもくらかしさぞいとく
とも

常陸宮

――蓬生女君　かのとゐまうしてつ御はうのみちなり（蓬生とよびけり）
末摘花のまへに源氏にあひ蓬生出来けり
末摘花にあたり鼻兄くるしく仏なりぬ
きんつし。末摘花とも

禅師

源氏明石の浦より御帰京ありて蓬生出給ひし
結いさらしきれにその流八講にまゐりて人さ
よはりよの女君乃わりくまゐりて源氏の御
さ経くらかしんくじよりの尊をまひとさり

右大臣（後く）

この大臣梅りえにゐえて末にみえしは

弘徽殿女御

梅りえに乗えへまゐりしか

按察大納言（又雲の上際の人のまへち）

五節ノ君

此女はもと吉田の斎姫にまゐりてやがて
まゐりくさふく姫君の服のむもとめし

参議藤原惟光 母大弐乳母

えいなまえとのひき源氏の御そばに親しう仕へ女は
惟光のことめでたく左京太夫になりけるより梅がえに宰相
になりて源氏の御身をはなれざりしとぞ

典侍

此女は童にて舞姫にいださるゝ夕霧の左大将
の君と契りし内侍の右大臣の君のおとゞへ
しめて典侍となりし絵に見えつゝ梅がえにて典侍
佐にめでたくみやづかへさせたまひて薫に
まうけたりしとぞ

藤内侍のすけ

源氏のめぐみ右大臣なりし時の蔵下姫との夕
霧大将の北の人数のうちにその君より内侍に
かうぶり藤典侍のすけになる

山河阿闍梨

夕霧は惟光が兄のよしみより比叡山の法華
堂にかくれて夕霧の上乃四十九日の仏経まう
しき

少将命婦 母惟光三女

夕霧の君を見わけてめぐくおぼして河内うし給し

此大貳のむすめにましてゑうしのきよしいときめらかく
とかねの舎姫なとくりをこゝろえしめしつくる人
しん

参河守高 母同
人来居やうし河こ通もありき

参議之女

明石乳母 母故院宣旨
ちゝの宰相はなくなりにし人にて母なんしらせて
後々ちうみくありへきうかゝくるすさま下
てんのすけとうとりける也源氏よりつけ給
又明石の御産の時さしくたしてつかはされ
へうし給ひてよくそひてまいりき後風よ姫君
よみしてのり

三位中将

夕顔上 母
致仕太臣頭中将と申せし時かよひておはしく
北の方のもとへきこえありて両夜のおどろかされけり
せしんにかくれうつりにて後よ夕顔と号
なく源氏中将よめぐりあひなにかしの院よとりまし
てかよふしけるかくれ給ひし御ねび年十九也

宰相

宰相君 夕顔の上のめのと

常乃宮にありつる人の由緒乃うち八女房六条
院よりよろ給しける人々の名まへすゞう
せられしゟ

太宰大弐

源氏須磨の浦よりよろ給し比筑紫よりの
のぼりて此大弐なりし人々

筑前守

昔源氏の故さることありて藤ばまさりてこそよろ給
つりきりらくの人数乃後に須磨の浦へまいり
しんく

五節君

昔源氏のあひ給ひし人也。父の大弐よりして津
くへくるりかしが千所の其よのがりうじ女付なる
まさしなひつてんゟ

前播磨守

若紫巻に播磨のうしまた

源義清

若紫の巻に義人みそろうらう給つる明石の
巻に源少納言身をとくしの巻に靭負佐
住吉詣の日赤衣をとるうり
也女に右中弁 近江守とうなる
つ源氏むつまじくめしつかひて義清惟光
とそいまふらくのうちに異してうらうぶり
きりに明石のうへにきしとりし人也。源氏
の是にてはやきの河ふ山ふかく明石の入道乃

しとそめのまゝ物語りしいでゝ、ふるきをしき

五節君

乙女巻にまゐりいでゝ時めきし女やうらく未
仕まつるべく候ごしありき

伊予守

故院にめされさせ給ひて後常陸になりてくだる。空
蝉のゝちの夫にならせぬ。空蝉の君ハ此守のこゝ

紀伊守

源氏中将中河の此方へうつりし家あるじして饗応
のこよ河内守になる。頼長ともありにや

蔵人右近将監

源氏の大将さい院の御禊につかうまつりし
時一負まうでまかりし人也。大将須磨の浦へおもむ
き給ひし時まうでゝ馬上の礼を
はらひ参らせ給ひて身をやつしにし蔵
人ゆるされいのぜうせんしより、松風にみえ
て侍りつる

蔵人少将 西の対方とうらせうしの君によせ

空蝉の君にいまくじぞめ紀伊守かひとり腹の
妹源氏空蝉のとりわけの恋人ゝ、ひそかに一夜をちぎり
給ひしへせを後移りぞの荻ともそれハ蒙
のうしとこそしれしゝく、大臣の蔵人少将
乃めよたる

● 常陸妙

えいみちの國うつ渡りハ常陸妙よたらぬ守
の君のまうちくゝ中将の君とゆへし人の男之

蔵人式部丞

これの書のちくゝ東宮の[?]よ内の治使女て勾当
常陸の女へまゐりうりし人之

蔵人左衛門監

母常陸の君よ同じ甚大納の者のゆかりよ相知
して母とよ子して蔵人となりぬ

童

母同じ重も人ねらとうべからず[?]
の君小せにまむりして[?]文づ

ひせし人

讃岐前司妻

源少納言妻

以上二人今の小少将の腹よあくこ

少将小方

母常陸よゆかし

以むこの少将ハ前の大納の子と以てちえハ東宮
の君よあわせんとして常陸守よハまかむ
もめとうてゆるしくハへうらさしきんとと
いひまれいちくりさぐくし以むとめよりつせなり

中宮大夫

明石中宮の大夫なり

太宰少弐　ゆふかほの君の乳母のおつと

姫君四ツにて御供してつくしへくだり侍て
そのかへらんとせし時節もこゝ病にわづらひて
うせぬるなりしゆふかほの君にあづかりそだて
年姫君十ばかりの時姉君もろともて侍る
とうれしきこともふるまひて京にのぼりて
なりぬべきありしみやこにいでゝとゞまりけり

豊後介　太郎也

ちかうせうを後年へてのちに家とはなれて姫君
うしろの方に姫君大夫監へまゐり給ふのち
もとの方にまんなきところにしゆうの肥前にかへり
ちかりてめやとき給ひいでゝかりてさへつかへ侍り

弟の兵藤太也

次郎

三郎

此みつりこのこはめるじまうきそしありへぬ
まよれは京へのかたんのくもりてそでまう
まきり肥後國の大夫監によりみられて姫君
のまたぞうんとうまへしくくく

姉おもと

これもつくしにもとつきそてのがれ

兵部ノ君

みれは昔のあてやかとおほき姫君よろしく
のちに

● 兵部大輔

「大輔命婦」 母左衛門乳母

内の女房也くはしくこのむまやくに源氏の事をは
まうしのみやうぶにはきこえしらせたてまつるなや
ひさき物ふるくにみすがたはしつかなる人の給ひける
みじしてつひすうし給ふよそのよくからに
ちかうくて常陸の宮の姫君とむつひまつらう
の宮乃事をとりつくしき

● 按察大納言

「女」 母は山僧都か妹也若紫まておもはくなり 紫上の母早世せし人なり

紫の上乃母なくの大納言うちまかせすめらとらく
しつき給ひかどよう十あまりもちかく君もさされ
給ひしうはなく後家尼君まりありつひ給ひ給
よき方の宮母ひき うしひ給ひしとよのりとれ
北の方やまうして思ひ入れ給ひてまかりやうくたる

● 大后

「弘徽殿女御」 弘徽殿の女御

花散里上

朱院の御時女御の御方にて源氏とそめ給

ひそかに六條院乃東の御方と申せ夕

霧の中将をやしなひそだてしゆかしき御

宮君又東院へうつり給

不入系圖人々

中務宮

夕霧大將宰相中將と申し時むすめの姫君にまうし

きこえし人梅枝の巻にみえたり

上野宮

薫大將中納言と申し時女二の宮の御事申しきこえ

させし日中務宮と殿上よばれし人

梅枝左大臣

春宮御元服の時女御まいらんとせしに明石の姫君まいり

給べきよしありてとひとゞまりし人

竹河左大臣

夕霧の中将の時宰相中將藤人かねと申し

時むすめをとり給し人

左大將

紅葉の賀乃日源氏青海波舞給しに垣下にて

菊をかざしてまひし人

右大將

若菜の巻にやまひによりて大將辞したまひ

し人

大納言
まきのすゑに朱雀院の勅別當

右大将
宇治の網代の時内よりまうでし人

大納言
白河殿の初瀬にまうでて給ひし宇治の御中宿の御迎にまゐりし人

中宮大夫
これも宇治へまゐりし人

右大将
不審
此二人紅葉賀に楊梅まひし人なとなるあのよし
これなるとあり

参議修理大夫
新女御入内に供奉せし人

兵衛督
源氏松風のまきに桂の御殿の日御車にありし頭中将しのびし人

民部卿
又夕霧の大臣元服の後あざなつけし時たうの将と名によばれし人

太宰大弐
是は受領なるに大弐にあたりてよろこび末摘花の
まうけこの北方の北にて

左中弁
朱雀院の女三宮の御乳母のせうと姫宮の御事
六条院に院の御事をきこえし人

左大弁
桐壺まきに源氏の御うしろみにて高麗人に逢ひし
人年へて松風にも桂の御遊に八月十五夜の
人々とよひさる人へしとあり前院御附きてさふらふ
うまつりさうり

右中弁
又夕霧の元服の後あざなつけ給ひし日作文の講師
せし人

蔵人弁
桂の院の日内裏より御使ひにまいりし人松風の
まきにみえたり

頭中将
同巻に御車よりのちにまいりし人松風の巻にみえたり

源中将　一本に父の按察の君に附くゆかしき人

修理大夫　源内侍にあひし人

常陸介宰相中将　昔の右大将乃子也、東屋に少将とて聟になりたる中将とある人、此常陸介ハ東屋の君の父也

右近中将　絵合に朱雀院より秋好中宮の御かたへ絵まゐらせし御つかひ

中務亮　女三宮の御乳母の夫なり、又ゆかし人

右馬助　今上天皇の御位乃時殿上人、又東の御語乃君のめの将也

馬頭　りもそみ此家乃君のもとにゆくくれせうと

式部大輔
文章博士　此二人夕霧入学時作文よみし人（少女巻）博士ハ題者なりき

大内記　夕霧の学文乃昔の師にてよろしきもの也と見えたり

民部大輔　此の中務乃宮のすゑなりにありし人

蔵人式部丞　冷泉院の御時乃六位文章生也、宇治物語乃人名なり

蔵人左衛門　野の宮乃日記也にて源氏のもとへまいりし人

民部丞　源氏乃家人なり

馬助　野分のつきの日夕霧此所にて中将にあひし時、もろ雲居のかの人にやりてある文給ひし人也

筑前守　大輔命婦かまくら、右近乃乳母がゆかしく

和泉前守　ゆかりの月夜の内侍乃女房中納言の君がせうとにて業乃よまうくなり

右近大夫　薫大将家人小野へゆきしをもかりし人

左衛門大夫　くら里火ともしつかはしし人

右大臣殿

大蔵大輔　桜家大納言　式部卿宮　安房国人なり 此東屋の妻なり

薫大将の家人石山より使せし人匂宮の御乳母人乃

此やうき舟の妻なりたり

紀伊守　是も大将の家人なり右近の妹の夫(?)にて御の君小野より

とも此大将の御かりうけたまはりしもの人

時方　匂宮の家人宮の御ともしてうち(?)へ参り 此者をも法

失せし人

因幡守　ありし宮の人時方がゆかりにて浮舟の君かくして川むかひよりかせし家あるじ

大内記　薫業みつく肥後国の人むかへしの君なり

さうらふ人

小山僧都　小山の右近兄弟の上乃母の姉

横川僧都　蓬雲の女院乃ゆかりの姉也女院御一家乃日

比かしゆかりもよろし人

小野僧都　小野のあまりにせうそこするひの君にて川をさる

しし人横川の僧都とも

護持僧都　比泉院の御持僧人夫もとの昔のまへとりきちう

たのもし人法勢僧都ともあり

宇治律師　宇治宮の法師冷泉院にまいりて御経をしへたてまつら
横川にすみし蜻蛉に律師

北山上人　源氏中将のわらはやみいのりやめし人

御導師　幻の巻に六条院の御仏名の導師

妙法寺別当　あふみやうかき人ちかしの平くのおやこの君は
この人にあえとしの給き

一条御息所　父大納言の皇女也 不審 朱雀院位の御時乃女御 不審 藤壺
の父乃母夕霧まう給

夕霧姫君　三位中将女夕霧妻に儀にちぬとし十九

桐壺内侍　三代の御門につかへつる人女四宮の御中まうそうせし人

平内侍
侍従内侍　これ二人絵合の時梅壺の御方にはし人

源内侍　朱雀院の御時の内侍のすけよしの程よりなまめかしき人年へて后によるかはじかくことよりし源典侍また
女五の宮の後源氏にあひし女五宮にあり

秋好女別当 大斎宮 歟　六条御息所の宣旨也し人

大江　絵合の時こき殿の御方

斎宮宣旨　今上斎宮の時の宣旨内侍のすけとなる

斎院宣旨　朝顔乃父の許より源氏よび向く斎院の事ーの給し人

靫負命婦　桐壺帝の衣かへ世給て後内の御使にかつらさし入
入されし人

弁内侍　絵合の時右方のめのわらは（本ノニ）

王命婦　藤壺の女院乃女房源氏の御なかたち

中将命婦

兵衛命婦　以上二人絵合の時こきでんの右方人

少将命婦　絵合の時梅壺の御方の御遊の御時ひきし人

摂津守乳母　明石入道が叔母　母（不審）

東屋君　昔ハ中将の君と云常陸介の妻

小宰相君　薫大将思人明石中宮の女房

按察君　同明石の中宮の女房

弁君　同宮女房

中納言君　葵上の女房源氏思ひて須磨へおもむき給ふ時の別乃時より
まさりし思ひける

中務君　同女房源氏にも逢給ひし後右大臣の中将にも心をかよはし
ひとりひとりにおもひそれども心つくしてやみし人

中将君　紫上の女房

少輔命婦　同女房常陸の宮の君も御けの夜乃暁をしけたりしやう
いひしれし人（今の本に氏ア のよのと）

中将君　六条御息所女房

少将君 宰相女
明石中宮の御めのと宰相か女

右近
夕顔の女房女君うせて後源氏の御方にさ

少納言君
紫上の御めのと也須磨の浦に相ひ給ひし人

宰相君
夕霧の大将乃めのと也葵乃上より源氏にあつかり母敷
院の御時乃せんじ殿

中務君
二条院にゐし後に紫上の御方にまゐりてゐし人

弁君
紫上の女房少納言か女三日のよれひする惟光が
まつりせしとりつぎし人

中将君
むかし紫の上の女房くんうせ給ひて後つきの年の四月
まつりの日ひわたる事あるくるしのくるしや

少将君
末摘の女房侍従かをば

侍従
同

少将君
明石女房姫君の里より姫君むかへられし時はうへより
て四車にのりし人ことづくしの君に源氏
ようらつきの別とおもしむすびをかし人

侍従
女三女房めのとこ見てくらり

侍従君
宇治の宮乃女房

宰相君
ゐぎらの大将乃北方の女房

大夫君
匂江君の文とりつぎし人

中納言君　むかし女房近江君のために書し人

弁君　玉かづらの女房

小侍従　二条院女房。柏木の心ざしに乳子なる

木工君　ひげくろ大将乃女房。ゆるのにかへりさまくえり給しよとのゞされ女房みなくとくまかりしんく

中将君　同

按察君　二条院女房源氏時々物いひ給し人

少将君　一条宮の女房人すゝまくべさしといひし人やまとのりしかいひけうし

右近君　同女房

中納言君　紫上の女房上にせかへて後三条宮にかへりて中将とせかくよりせし人

大輔君　玉かづらの姫君みかどへまいりてのちそむかれし時うらさくの女房

ナレキ
馴公　同まけぐさ

中将君　同女房藤人がねくそうひし人

按察君　かほる大将の女房ゆかり[illegible]人

大貮君　宇治の中君乃女房。姫君二条院へいらしてのち一時うきつきさせよりといひし人

右近君　同女房大輔が女東屋の君中の君乃御かたへまゐりて一夜日ものがたらひし給しあくるまで文をまゐらせしをも見つゝかくしけるしげなりし人

大輔君　宇治の中君の女房二条院にまゐるをしたひし人

少将君　同女房

右近　うき舟の女房

左衛門大夫　ときかたの人々

侍従　同女房姫君三條のしのび所におはせし時大将宇治へぐしておはせし御車乃あとにのりし人よとせて後一品宮へまゐりてゆき

弁御許　明石の一品宮女房となりて都へのぼりてたりし人

中将君　同女房名をしてあづまなれといひし人

あてき　葵の上乃ちかくつかへし人後に兵部卿宮のかよひ給ふをもしらず。もとめつく〳〵しくおぼつかなき君　不審

宰相君　中将君にかはりし

衛門督後家尼　手習の君をやしなひし人横川の僧都がいもうと乃尼とぞ

小野大尼公　僧都并いもうと尼乃母

大弐北方　末摘の君乃母かたのをばにて侍従をもひきぐしてくだりし人なき世をよろこびてくだり

明石　かの中務の宮乃むまごにて此明石の浦にすみけれど都にのぼりてのち

少弐妻　玉かつらの君乃めのとに

大弐乳母　源氏の御めのと惟光朝臣母なるが母

左衛門乳母　同御めのと大弐乃めのとにつぎて思されし人　按ニ
筑前守がめなりてしかも大輔命婦が母

大弐乳母　三条の上乃めのとをのこどもに六位まくぞせんと
せし人

宰相乳母　夕ぎりの君乃めのと

こもき　その后乃女房

侍従　同

無名人

一人　馬頭の物語に馬助の指くひきりし人

一人　同巻物語に琴ひきし人

一人　同物語に式部がかたらひし博士のむすめのごく熱の
さうやくぶくしける人

一人　六条わたりの御忍びありきの比入るさの暁に忍びある
惟光して寄るがうちにいひつかはし入し人

一人　源氏の花ちる里へおはせし中川のほとりに通て
ことしみ昔にほのめかし惟光して歌はせ給し処

一人　五月雨の夜の宿にまつ君が物語に語りかはし人々のうち人

三人 胡蝶乃まひり春の花ざかり舟にのりて舞た
てまつりし人

一人 まつりの日むまにのりて三示の花あそびに庭に坐り
てとのがねとぞりきみてつみちとひし人

一人 宇治の中君の女房早蕨に声なくらひ給し
内車にせられ大君の書うまつれせるにもといひしを
しまもれかりしひしさとへもわれねといひし人

一人 つぎのふに一まへ文けうさふくろすくの舞に挑まれ
やいもうしらそむきていひし人

一人 東屋巻に常陸守女右をかねに蝶をしらる人

巻之次第

十二 絵合 卅

十三 松風 同

十四 薄雲 卅 卅一

十五 槿 卅一

十六 乙女 卅三 卅四

十七 玉鬘 卅五

初音 卅六正月

胡蝶 同三四月

蛍 同夏

常夏 同六月

篝火 同秋

野分 同八月

行幸 卅六十二月 卅七二月

藤袴 卅七八 九月

槙柱 卅九正二月

十八 梅枝 卅九正二月

十九 藤裏葉 卅九三月 十月

廿 若菜上 卅九四十 四十一

司下 四十二三月四十六七 四十二ヨリ四十六 上八不見

廿一 柏木 四十八

廿二 横笛 四十九

鈴虫 五十

廿三 夕霧 五十八月冬

廿四 御法 五十一自春 至秋

廿五 幻 五十二正月 至十二月

廿六 雲隠

廿七 匂兵部卿 薫元服十四 至十九巣

紅梅 薫十九

竹河 薫十四又 至十九巣

宇治十帖

一 橋姫

二 椎本

三 総角

四 早蕨

又　宿木　　六　東屋
七　浮舟　　八　蜻蛉
九　手習　　十　夢浮橋
清少納言作加巻々名
桜人　巣守　八橋　さしくし
花見　嵯峨野の上下
古物語名
伊勢　竹取　うつほ　狭衣　作者太弐三位 紫式部女也
正三位　隠蓑　岩屋　せりかは

住吉　濱松　こまのゝ　清枕草子
かたのゝ少将物語　清枕草子　唐守
藐姑射（はこや）　大和　在原滋春作或ハ花山院製作云々
源氏数本事
行成卿　自筆　今世不伝
源光行　以八本ヲ校合本云々
冷泉中納言朝隆本
堀川左大臣俊房本　号黄表紙
従一位麗子本　當家相傳　土御門右大臣女 号京極北政所

法性寺関白本　唐紙小草子 号尚侍殿本

又條三位俊成本

京極中納言定家本　号青表紙

一 源氏ハ寛弘始一條院御代より出現して世に流布する事ハ康和の末堀川院御代也

一 水原抄　大監物光行作也

一 紫式部ハ鷹司殿官女也和継て上東門院ニ祗候と

一 式部墓所ハ西雲林院白毫寺南也

一 式部檀那院贈僧正ニ許可をえて天台一心三観の血脈を入云々

一 河海ハ善成公ハ丹波氏忠守朝臣ニ従て是(?)

一 紫明抄十巻　親行作　光行子 親行法名孝寂(?)

村上皇女 大斎院安子 選ゟ　母九条右丞相女

上東門院　八十七崩 法名清浄覚　法成寺(?)関白女　後一条後朱雀 二代國母

宇多天皇　仁和一 寛平九

醍醐天皇　昌泰三 延喜廿二 延長八

三条朱雀也号後院 朱雀院　承平七 天慶九

村上天皇　天暦十 天徳四 応和三 康保七

冷泉院　安和二

此一冊依桂菀主所望以家本加書寫者也

天文十九秊六月日　　桃華宗央 判

同廿七月一挍合

愚案此系図之人名及註之小書等不審
之事不少也蓋以河内本青表紙等之
本有差異之故乎且又展轉書寫之誤
手雖然今任所持之一本而強不加私
勘考者也追而以正本可改矣